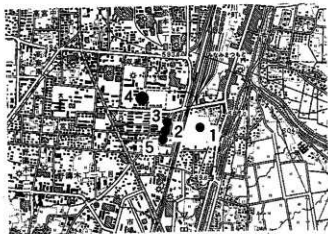


長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡Ⅴ

——緊急発掘調査報告書——



1999.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成10年4月10日～4月21日に実施された松本市芳野に所在する出川南遺跡第5次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は株式会社トーエネックサービスによる社員寮建設に伴う緊急発掘調査であり、株式会社トーエネックサービスより松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆・編集は田多井用章が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。
遺物洗浄：百瀬二三子
遺物保存処理・復原：内沢紀代子、林 和子
遺構図整理：石合英子
遺物実測：竹平悦子、洞沢文江、松尾明恵、横山真理
トレース・版組：田多井用章、洞沢文江
- 5 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。
竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P
- 6 図中で用いた方位記号は全て磁北を用いている。
- 7 調査実施及び本報告書作成にあたり、以下の方々から協力・教示を得た。記して感謝申し上げる。
幹後淳建築設計事務所、山田真一、渡辺博人（五十音順、敬称略）
- 8 遺構・遺物の記述中で用いた古代の土器の時期区分・用語については下記文献に拠っている。
小平和夫 1990 「第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内1－総論編』 幹長野県埋蔵文化財センター
- 9 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館(〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189) に収蔵されている。

目 次

例 言

目 次

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過 3
2. 調査体制 3

II 遺跡の位置と環境 4

III 調査の結果

1. 調査の概要 4
2. 遺構 5
3. 遺物 7

IV まとめ 7

1. 調査の経緯

1. 調査に至る経過

出川南遺跡は、南松本駅周辺の市街地のなかに位置し、これまで開発行為に伴って、緊急発掘調査が行われている。こうしたなか、平成10年3月に株式会社トーエネックサービスによる社員寮建設工事にかかわる埋蔵文化財の保護について照会があった。事業地は、出川南遺跡の南端に近接し、埋蔵文化財を包蔵する可能性があったため、事業者と協議を行い、試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認することとした。

試掘調査は平成10年3月28日～30日に実施され、古墳時代から平安時代の遺構・遺物が確認された。この結果を踏まえ、再度遺跡の保護協議を行い、建設工事により埋蔵文化財が破壊される建物建設範囲について発掘調査を行って遺跡の記録保存を図ることとなり、株式会社トーエネックサービスと松本市の間に平成10年4月10日付けで発掘調査業務の委託契約書が締結され、松本市教育委員会が発掘調査を実施する運びとなった。現地での発掘調査は平成10年4月10日～21日まで行われ、終了後引き続き考古博物館において、整理作業および本報告書の作成を行った。

2. 調査体制

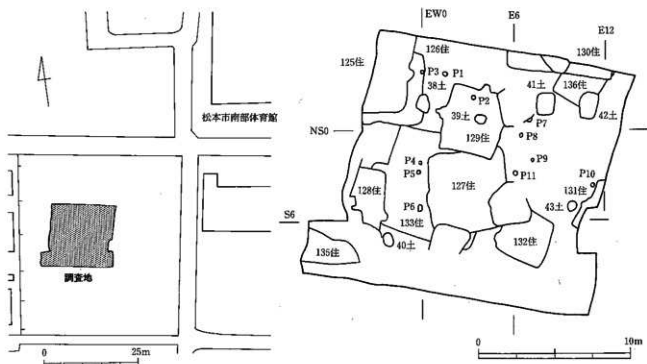
調査団長 松本市教育長 守屋立秋（～6.30）、舟田智理（7.1～10.15）、竹濶公章（11.1～）

調査担当者 横山和明、澤柳秀利、田多井用章、太田圭郁、百瀬秀俊

調査員 今村克、松尾明恵

協力者 浅井信興、石井脩二、内沢紀代子、大月八十喜、神田栄次、清沢智恵、斉藤政雄、鷲見昇司、竹平悦子、林武佐、藤本利子、布山洋、洞沢文江、丸山恵子、百瀬二三子、横山清、横山真理

事務局 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、久保田剛、近藤深、上條まゆみ



第1図 調査地位置図及び遺構配置図

II 遺跡の位置と環境

出川南遺跡は、現在の松本市芳野・双葉両地区に位置する。標高は約590～600mほどで、奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する沖積扇状地性堆積の末端に形成されている。現在は市街地化が著しい地域で、これまでに開発行為に伴う緊急発掘調査が4度にわたり行われている。

第1次調査はJR南松本駅南東の市営住宅建設に伴って行われた。遺構検出面が2面あり、上層では平安時代（9～11世紀）の住居址が3軒、下層からは古墳時代後期の住居址が1軒ほか確認されている。第2次調査は松本市南部体育館建設に伴って行われ、古墳時代後期の住居址1軒ほか確認されている。第3次調査は第2次調査地点の北側に隣接した南部公民館建設に伴って行われ、古墳時代後期～平安時代の住居址6軒が確認されている。第4次調査は、ジャスコ南松本店建設に伴って行われ、古墳時代の住居址113軒、平安時代の住居址3軒、掘立柱建物址21軒他が確認され、該期集落として松本平で最大の規模であることが判明した。特筆すべきは、中期古墳が3基確認された（平田里古墳群第1～3号古墳）ことで、埴輪をはじめ多数の遺物が出土している。

以上のように、これまでの調査では弥生時代後期から平安時代にかけての集落址であることが把握できる。今回の調査地点は、当初把握していた出川南遺跡の範囲の南端に近接した地域で、今回の調査により初めて埋蔵文化財包蔵地であることが判明したものである。

III 調査の結果

1. 調査の概要

調査にあたっては、重機により遺構検出面までの表土除去を行った後、人力により検出・遺構掘り下げを行い、調査終了後重機による埋め戻しを行った。遺構などの測量記録は、磁北方向に沿って任意の3m方眼を設定して行った。

調査区の基本的な土層構成は、表土・攪乱土層の下に2つの灰褐色土層が堆積し、その下に暗褐色土層が堆積していた。遺構はこの暗褐色土層中に掘り込まれていた。表土除去にあたって、この暗褐色土層の上面から10cm程度下げたところを検出面とした。遺構覆土と、地山である暗褐色土層は色調の判別が難しく、検出作業は困難を伴った。このため、土坑等の規模の小さな遺構は検出できずにいる可能性もある。後述のように、今回の調査地点では古墳時代後期～平安時代の遺構が確認されたが、概して平安時代の遺構の覆土が地山に近似した色調をしているのに対し、古墳時代の遺構覆土は若干黒みの強い色調をしていた。今回の調査地点では、同一の検出面で両期の遺構が確認されたが、遺構の掘り込み面は古墳時代の遺構の方がより深いところであったためか、古墳時代の遺構の検出は特に困難を伴い、平安時代の遺構の床面まで下げて初めて古墳時代の遺構のプランが確認できたものもあった。

調査の実施期間・面積・検出遺構・出土遺物の概要は下記のとおりである。

調査期間 平成10年4月10日～4月21日

調査面積 281㎡

検出遺構 竪穴住居址 11軒

土坑 6基

ピット 11基

出土遺物 土器（土師器・須恵器）・鉄器

2. 遺構

(1) 竪穴住居址

今回の調査で11軒の竪穴住居址を確認できたが、そのうち第126・136号住居址は調査日程の都合上一部のみしか掘削することができず、その詳細は不明である。なお、第134号は欠番である。

①第125号住居址

保存状態は良好で、石組のカマドは北側の袖石が良好に残存していた。火床面及び内壁は顕著に赤化。柱穴その他のピットは検出できなかった。遺物はカマドを中心として出土しており、カマド内には完形の須恵器の蓋が逆位で据え置かれていた。出土土器の様相から5期に帰属するものであろう。

②第127号住居址

カマド及び柱穴その他のピットは検出できなかった。127号住を切っており、床面でそのプランが確認された。覆土中より遺物が少量出土している。遺物は1期と6期のものがあるが、1期のものは本来133住に伴うものと思われ、本住居址は6期に帰属するものと考えられる。

③第128号住居址

東壁やや南寄りに煙道状の張り出しが見られ、この部分の覆土中には炭化物が多量に混入しており、袖石・火床面等は検出されなかったものの、カマドの可能性はある。遺物は東壁寄りを中心として少量出土している。帰属時期は不明である。

④第129号住居址

カマドは上部が削平されており、火床面と煙道部分が確認でき、焼土が分布していた。柱穴等は確認できなかった。中央やや北寄りには焼土及び礫が分布しており、別遺構のカマドあるいは炉の可能性も考えられたが、そのプランを確認することはできなかった。遺物はカマドを中心として出土している。出土土器から6期に帰属するものと考えられる。

⑤第130号住居址

大半が調査区外にあり、中央部に攪乱を受けており、詳細は不明。東側の南壁寄りにピットが検出され、その覆土中には多量の焼土が混入していた。遺物の出土量は比較的多く、6期に帰属すると考えられる。

⑥第131号住居址

東側の大半が調査区外にあり、詳細は不明。柱穴その他のピットは確認されなかった。遺物はわずかに出土したのみで、本住居址の帰属時期も不明である。

⑦第132号住居址

遺構はほぼ中央に多数の礫が分布していた。土層断面では礫の分布とほぼ重なるようにして色調の異なる覆土が堆積しており、別遺構の可能性が高い。上面ではこれを確認することができず、掘削の際は同時に掘り下げてしまった。カマド及び柱穴等は確認できなかった。遺物は少量出土したのみで、本住居址の帰属時期も不明である。

⑧第133号住居址

127・128・129住に切られ、また東南隅付近に攪乱を受けているものの、概して保存状態は良好であった。カマドは両袖及び袖石が残存しており、火床面および内壁は赤化していた。柱穴その他のピットは確認できなかった。遺構の西側約3分の2ほどの範囲で、床面直上に炭化物を多量に含む覆土が分布していた。この覆土は西側で厚く堆積しており、5～10cm程度の厚さがあった。また遺構の中央やや南寄りに焼土の分布が見られた。遺物はカマド付近及び覆土中より多数出土し、土器のほか鉄器も出土している。出土土器の様相から1期に帰属するものと考えられる。

住居 No.	図 No.	平面形	規模		主軸方向	カマド形態 種類・位置	時期	備考
			長軸×短軸×深さ(cm)	床面積(m ²)				
125	2	隅丸方形か	(540)×(288)×20	(12.7)	N-99°-E	石組 東壁中央	8世紀末～ 9世紀初	126住を切る
126	2	〃	(488)×(400)×40	(6.9)	N-4°-E	不明	不明	133住を切る 125住・ 38土・P3に切られる
127	2	隅丸方形	540×520×16	(24.6)	N-6°-W	〃	9世紀前半	129・133住を切る 攪乱 にあう
128	2	隅丸方形か	488×(216)×20	(6.5)	N-100°-E	東壁中央か	不明	133住を切る 攪乱にあ う 区域外にかかる
129	3	方形	424×400×32	(14)	N-74°-W	西壁中央	8世紀末～ 9世紀初	133住を切る 127住に 切られる 攪乱にあう
130	3	不明	(704)×(108)×62	(5.5)	不明	不明	9世紀後半	136住を切る 攪乱にあ う 区域外にかかる
131	3	〃	(360)×(60)×22	(1.4)	〃	〃	不明	区域外にかかる
132	3	隅丸方形	360×340×36	(9.3)	N-23°-E	不明	不明	攪乱にあう
133	4	方形	700×700×36	(45.6)	N-72°-W	石組 西壁中央	7世紀後半 ～末	126・127・128・129住 P12に切られる
135	3	不明	(388)×(288)22	(5.6)	不明	不明	8世紀後半 ～9世紀初	攪乱にあう 区域外に かかる
136	3	不明	(312)×(284)×-	(5.2)	N-118°-E	東壁中央か	6世紀後半 ～末	130住・42土に切られる 区域外にかかる

第1表 住居址一覧表

土坑 No.	図 No.	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
38	4	不整長方形	108×84×10	不明	126住を切る
39	4	楕円形	80×60×6	不明	139住を切る
40	4	〃	92×72×12	不明	
41	4	長方形	148×120×58	中世か	
42	4	〃	180×120×56	中世か	
43	4	円形	72×40×12	不明	

第2表 土坑一覧表

⑨第135号住居址

大半が調査区外にあり、北東は攪乱にあっている。カマド及び柱穴その他のピットは確認できなかった。遺物は少量出土したのみであるが、鉄器が出土している。出土土器から4～5期に帰属するものと考えられる。

⑩第136号住居址

調査日程の制約のため完掘に至らず、一部を掘削したのみであったため、詳細は不明。覆土中より少量遺物が出土している。出土土器から古墳時代後期(6世紀後半～末)に帰属すると思われる、今回の調査地点では最も古い時期に帰属するものである。

(2) 土坑・ピット

土坑6基・ピット11基を検出したが、先述のように検出が困難であったため、見落としているものもあると思われる。共に大半は円形・楕円形を呈し、遺物等を伴うものはない。土坑・ピットとも建物址・柱穴列を構成すると思われるものはなかった。ただ、土坑41・42は形態が近似しており、何らかの遺構を構成するものと思われる。また、この2つは覆土が灰褐色の粘質土と他の遺構とは全く異なっており、おそらく中世に帰属するものと思われる、注目される。

3. 遺物

(1) 土器

今回の調査では、竪穴住居址・土坑・遺構外検出面から土器が出土しており、そのうち110点を図化した。年代的には古墳時代後期～平安時代前半にわたる。例言7項に掲げた小林和夫氏による該期編年に従い住居址単位に出土土器を概観したい。なお紙数の都合から一覧表は133号住居址出土土器のみを対象とした。

各住居址のうち、器種構成がある程度うかがえるものとして第133住・129住・130住が挙げられよう。133住出土土器群では、食膳具は須恵器環A・環B・環蓋A・環蓋B・椀・高坏・鉢A・鉢C・皿、土師器環・椀・高坏があり、須恵器が中心をなす。煮沸具は土師器甕A・甕B・小型甕A・小型甕B・甕A、須恵器甕がある。貯蔵具は須恵器長頸壺・短頸壺D・甕・プラスチック瓶、土師器壺がある。注目すべきは搬入系の土器が見られることで、美濃須衛窯産の須恵器として60・61・64・73が、尾北窯産のものとして68・90がある。また畿内系暗文土師器環として84・86がある。プラスチック瓶の92は湖西窯産であろう。以上から133住出土土器群は在地の土器の構成が把握でき、またこれに伴う搬入系土器も確認できることから、1期の良好なまとまりを示す資料といえる。

第129・130住では、食膳具に須恵器があるが黒色土器Aも少量みられる。須恵器環Aは底部回転糸切り未調整で、外傾が強い開いた器形で外面のロクロ目が顕著である。129住18・130住33・34は軟質須恵器に近い焼きであるが、内面の見込みが残存している。煮沸具では定型化した土師器甕Bが特徴的である。以上から129住、130住はともに6期に位置づけることができよう。

出土量が少ないものの、土器の形態等から第125住は5期、第127住は6期、第135住は4～5期に位置づけられよう。第136住は完掘できなかつたため土器群の構成も詳細は不明であるが、須恵器環・土師器甕があり、形態等の特徴から古墳時代後期（6世紀後半～末）であると思われる。その他の第128・131・132住出土土器群については量が少なく、時期も不明である。

(2) 鉄器

鉄製品7点と鉄滓1点が出土。刀子1点が132住から出土したほかは全て133住出土。刀子では1が両関の可能性があり、4は棟側に関しては見られない。5の鎌の形態は松本市阿田町遺跡第2次調査第4030住に類例がある。6は轡の引手で、住居址内からの馬具の出土例として注目される。

IV まとめ

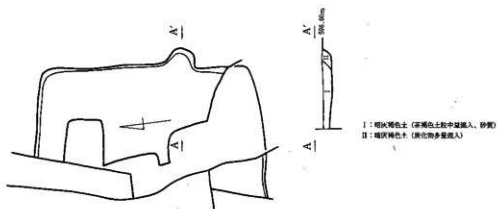
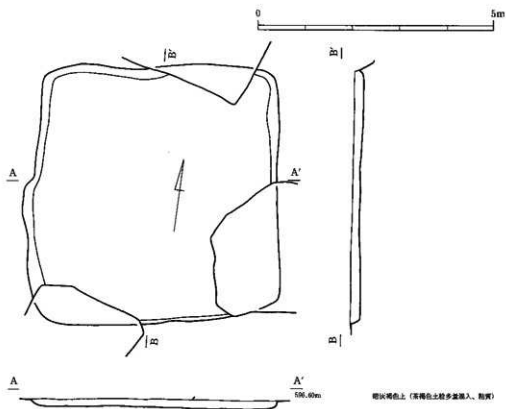
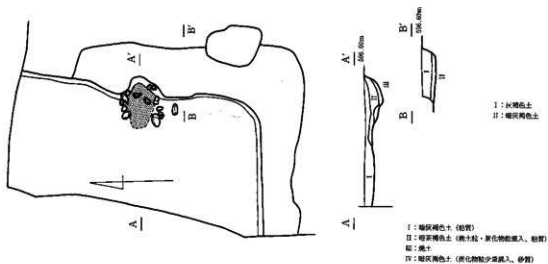
今回の調査地点では、古墳時代後期～平安時代前期までの集落址の一部を確認できた。これまでに今回の調査地の北側に隣接した地区で調査を行った（第2・3次）が、この際の調査所見を追証でき、さらにこれまで今一つはっきりしなかつた平安時代の集落の存在を把握できた。また今回の調査地点では、古墳時代後期～奈良時代初頭の遺構と、平安時代の遺構とがほぼ同一の面で検出でき、間層をはさまなかつた。出川南遺跡でも東側の第1次調査地点では、平安時代の遺構面の下に、間層をはさんで古墳時代以前の遺構面が確認されている。こうした基本層序の違いは、遺跡の形成過程を把握するうえで重要な所見であろう。

出土資料の中では、第133号住居址出土の土器群が良好なまとまりを示しており、今後の基準資料の一つとして位置づけることができよう。

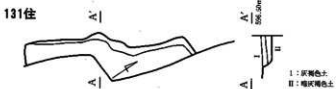
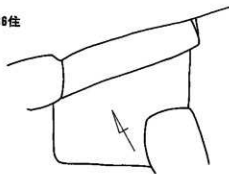
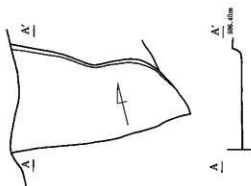
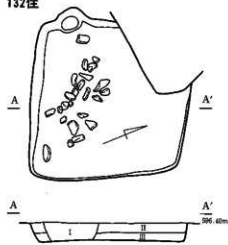
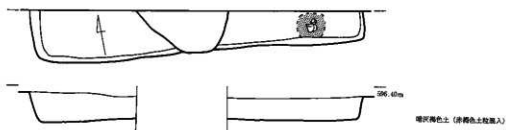
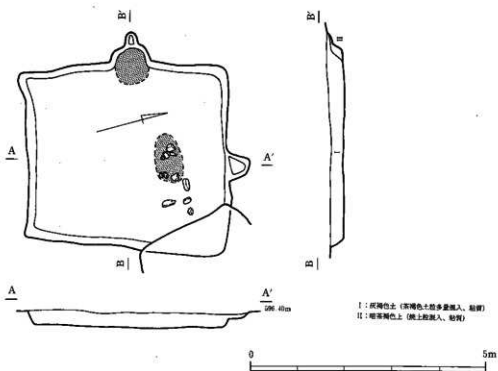
なお、平成10年度には、本遺跡の第6・7次調査が行われた。第6次調査地点は第1次調査地点の北側に、第7次調査地点は今回の第5次調査地点の北側に隣接する。ともにこれまでの調査所見とほぼ同様の遺構・遺物が確認されている。今回の調査成果と合わせ、本遺跡のありようをより明らかにできるものと思われる。

No.	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度 口縁 底底	色面		成形・調整・形類の特徴等
							外	内	
53	須恵	蓋A	9.6	—	2.9	完	—	暗青灰 暗青灰	ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ(ロクロ左回転)
54	須恵	蓋A	15.0	—	—	1/8	—	暗青灰 暗青灰	ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ(ロクロ左回転)
55	須恵	蓋A	12.8	—	1.9	完	—	青灰 青灰	ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)
56	須恵	蓋A	15.0	—	—	一部	—	明青灰 明灰褐	ロクロナデ ロクロ目録著 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)
57	須恵	蓋A	(15.6)	—	—	1/12	—	明青灰 明青灰	ロクロナデ 外面自然釉付着
58	須恵	蓋A	(16.6)	—	—	1/5	—	灰褐 灰褐	ロクロナデ 内外面自然釉付着 胎土中に3mm程度の砂粒含む
59	須恵	蓋A	(16.6)	—	—	1/6	—	灰褐 灰褐	ロクロナデ 外面自然釉付着
60	須恵	蓋A	(15.0)	—	—	1/8	—	明灰褐 明灰褐	ロクロナデ 外面自然釉付着 焼成調整 美濃陶窯産
61	須恵	蓋A	(16.0)	—	4.1	1/8	—	明灰褐 明灰褐	ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 長石含む 美濃陶窯産
62	須恵	蓋B	(18.0)	—	—	—	—	明青灰 明青灰	ロクロナデ
63	須恵	蓋B	(14.2)	—	—	一部	—	暗灰 暗灰	ロクロナデ 天井部外面ヘラケズリ(ロクロ左回転)
64	須恵	環A	—	7.1	—	—	—	明灰褐 明灰褐	ロクロナデ 底部へう切り?ナデ 長石含む 美濃陶窯産
65	須恵	皿	10.4	7.4	1.5	完	完	灰褐 灰褐	ロクロナデ 底外面中央に突起 器内面に同心円の2線の沈線
66	須恵	環A	8.4	—	—	1/6	—	灰褐 灰褐	ロクロナデ
67	須恵	環A	10.4	7.2	4.0	3/4	完	灰褐 灰褐	ロクロナデ 底部丁寧な回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)
68	須恵	環B	(16.0)	(10.9)	4.4	1/5	1/2	明灰褐 明灰褐	ロクロナデ 内外平滑 底部丁寧な回転ヘラケズリ ロクロ目録著 胎土黒色 尾北窯産
69	須恵	環A	(14.0)	7.1	—	1/16	—	灰褐 灰褐	ロクロナデ 底部手持ヘラケズリ
70	須恵	環A	—	(10.0)	—	—	一部	暗青灰 暗青灰	ロクロナデ 底部手持ヘラケズリ
71	須恵	環A	(10.0)	(7.0)	(3.8)	1/4	1/5	暗灰 暗灰	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 自然釉(黒褐色)付着
72	須恵	環A	(14.8)	(8.6)	—	1/6	—	暗灰 暗灰	ロクロナデ 胎土中に5mm程度の砂粒含む
73	須恵	環A	(16.2)	11.2	3.7	1/5	5/8	明灰褐 明灰褐	ロクロナデ 底部丁寧な回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 長石含む 美濃陶窯産
74	須恵	環A	13.4	7.6	3.7	3/4	完	青灰 青灰	ロクロナデ 底部手持ヘラケズリ
75	須恵	椀	(14.2)	(4.9)	4.0	1/8	一部	淡灰 淡灰	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) 焼成不良 砂粒多く含む
76	須恵	椀	(13.4)	(7.6)	4.7	1/12	一部	摩滅 摩滅	内外とも摩滅著しい 砂粒多く含む
77	須恵	椀	(14.0)	(7.9)	4.6	1/6	一部	黒褐 黄褐	ロクロナデ ロクロ目録著で下半は發をなす
78	須恵	椀	(14.0)	(8.2)	5.4	1/6	1/5	黒褐 黒褐	ロクロナデ ロクロ目録著 底部付近ヘラケズリ 焼成不良 砂粒多く含む
79	須恵	椀	(12.2)	(7.4)	5.4	一部	一部	摩滅 灰褐	ロクロナデ 底部付近手持ヘラケズリ
80	須恵	椀	—	—	6.4	—	1/3	明灰茶 明灰茶	ロクロナデ ロクロ目録著 底部付近ヘラケズリ 焼成不良 砂粒多く含む
81	須恵	椀	(15.0)	(8.9)	5.2	1/3	3/5	黒褐 黒褐	ロクロナデ 底部付近回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 器内面靱に凹凸
82	須恵	高环	(15.0)	—	—	1/8	—	暗褐 暗青灰	ロクロナデ 外面底部以下回転ヘラケズリ 長石多く含む
83	須恵	椀	(13.4)	(6.2)	(6.1)	1/3	3/4	暗褐 暗褐	ロクロナデ 底部付近ヘラケズリ 砂粒多く含む
84	土師	環	—	—	—	—	—	橙褐 橙褐	内外面ミガキ 器内面縮み 器内面土師坏
85	土師	環	(14.2)	(9.8)	3.7	一部	1/6	黄褐 黄褐	ロクロナデ ロクロ目録著 底部付近手持ヘラケズリ
86	土師	椀	(15.2)	—	—	1/4	—	橙褐 橙褐	内外面ともミガキナ 摩滅のため詳細不明 器内茶色
87	土師	椀	(15.4)	(7.9)	—	3/8	1/2	明橙 黒	内面黒色地味 内外面ミガキ 底部付近はケズリ後ミガキ
88	土師	高环	—	—	—	—	—	淡褐 黒	内面黒色地味 内外面ミガキ 底部付近はケズリ後ミガキ
89	土師	高环	—	—	—	—	—	淡褐 淡褐	外面ケツミガキ 内面ナデ
90	須恵	壺	(21.6)	—	—	1/8	—	明灰褐 明灰褐	ロクロナデ 内外面とも平滑 内外面自然釉付着 胎土黒色 尾北窯産
91	須恵	高环	—	(10.6)	—	—	1/4	暗褐 暗褐	ロクロナデ 焼成やや不良
92	須恵	瓶	(10.0)	—	—	1/4	—	灰褐 灰褐	ロクロナデ 内外面自然釉付着(線) フラスコ風 美濃陶窯産
93	須恵	短頸壺	(15.4)	—	—	1/12	—	暗褐 暗褐	ロクロナデ 長石多く含む
94	須恵	短頸壺	(20.0)	—	—	1/6	—	明灰褐 明灰褐	ロクロナデ 長石多く含む
95	須恵	短頸壺	(17.0)	—	—	1/5	—	暗青灰 暗青灰	ロクロナデ
96	須恵	壺	(26.2)	—	—	1/10	—	暗青灰 暗青灰	ロクロナデ 外面ロクロ目録著
97	須恵	鉢A	(19.2)	—	—	1/5	—	暗褐 暗褐	ロクロナデ 焼成不良 砂粒多く含む
98	須恵	鉢C	(19.2)	—	—	1/6	—	黒 黒	ロクロナデ 焼成不良
99	土師	小型壺A	(12.6)	—	—	1/4	—	淡橙 淡橙	ロクロナデ 内面摩滅
100	須恵	長頸瓶A	—	8.2	—	—	完	暗灰 暗灰	器底回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) 内外面自然釉付着 壺型に焼成時の跡
101	須恵	長頸瓶B	—	—	—	—	—	灰 灰	ロクロナデ 内外面自然釉(黒褐-暗緑)付着
102	土師	壺	(14.8)	—	—	2/5	—	暗橙 暗橙	ヨコナデ
103	土師	壺A	—	(9.0)	—	—	2/3	橙褐 橙褐	内外面ケズリに近いタテの工具ナデ
104	土師	壺	—	(6.8)	—	—	2/3	黒褐 黒褐	内外面ミガキ 焼成前穿孔(外面-内面)
105	土師	壺	—	(8.6)	—	—	1/3	淡橙 淡橙	外胎にヨコミガキ 内工具ナデ 器底黒色 磨付含む
106	土師	壺A	(20.6)	—	—	1/3	—	橙褐 橙褐	内外面ナデ(内面は上平コ、下半タテ 外面はタテ)
107	土師	壺B	(22.3)	(7.5)	1/3	1/6	橙褐 橙褐	外面タテハケ 内面口縁部コハケ 器底胎ナデ一部コハケ	
108	須恵	壺	—	(10.6)	—	—	1/4	灰 灰	内外面摩滅
109	須恵	瓶	—	(15.8)	—	—	一部	灰 灰	外面タテタテ 内面ナデ 穿孔は器底-内面
110	土師	壺A	(24.2)	—	—	1/2	—	淡橙 淡橙	口縁部ヨコナデ 割産工具ナデ

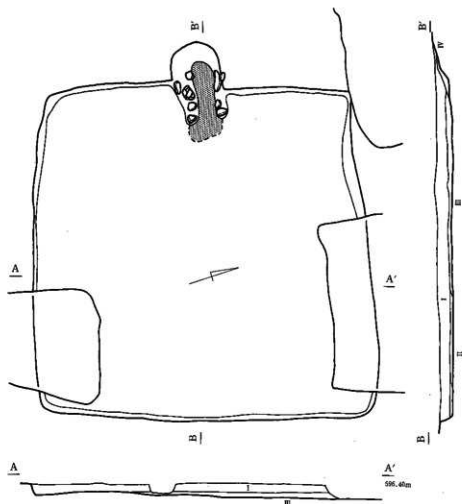
第3表 第133号住居址出土土器一覧表



第2图 第125~128号住居址



第3图 第129~132・135・136号住居址

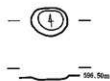


I : 暗灰褐色土 (高褐色土を少量・1~2cmの層中混入、粘質)
 II : 暗赤褐色土 (粘質)
 III : 暗灰褐色土 (褐色物粉少量混入、粘質)
 IV : 黄土

38土



39土



40土



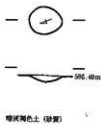
41土



42土

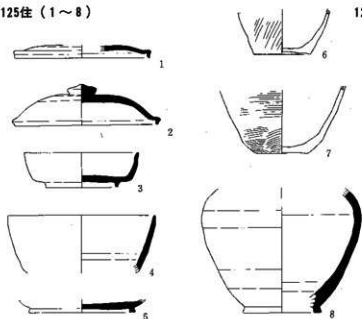


43土

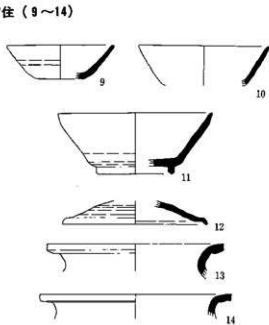


第4図 第133号住居址・第38~43号土坑

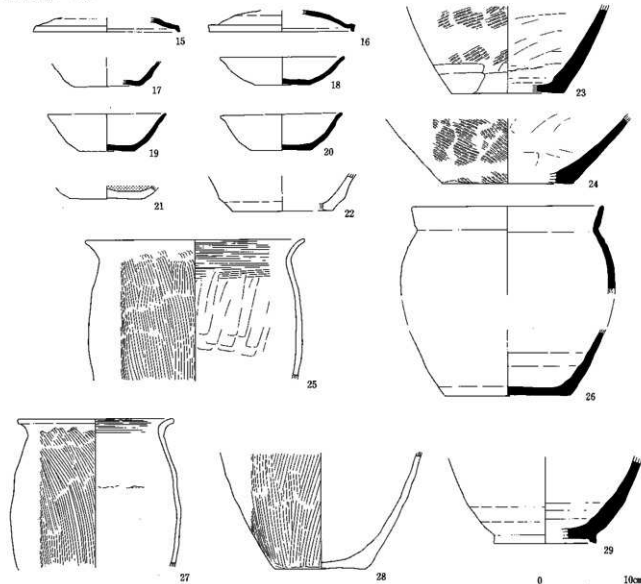
125住 (1~8)



127住 (9~14)

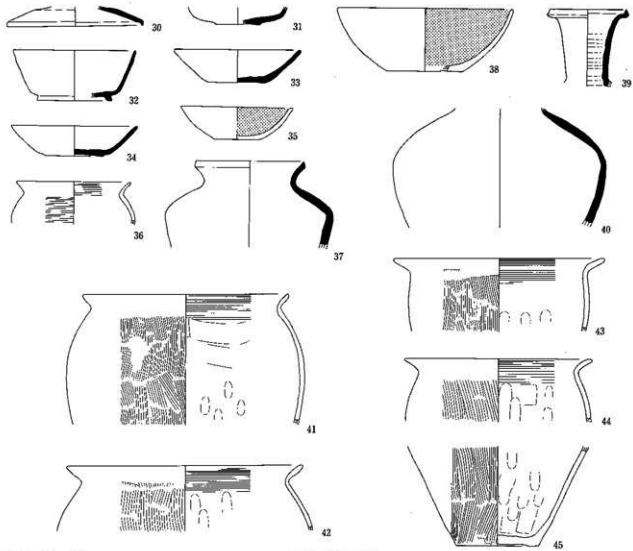


129住 (15~29)

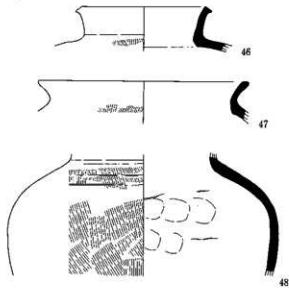


第5図 出土土器(1)

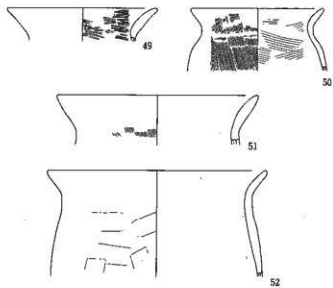
130住 (30~45)



132住 (46~48)

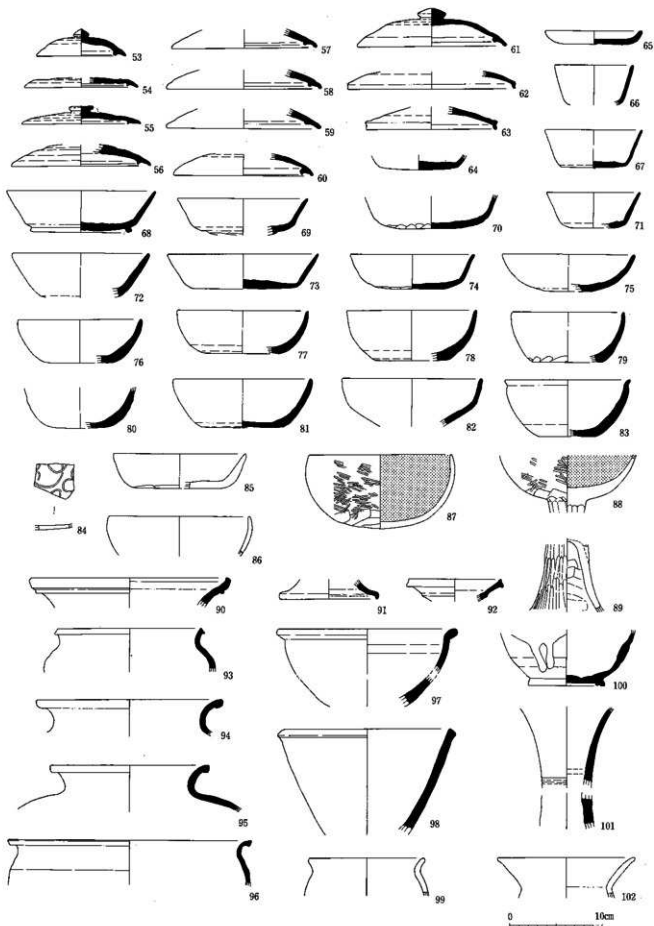


136住 (49~52)

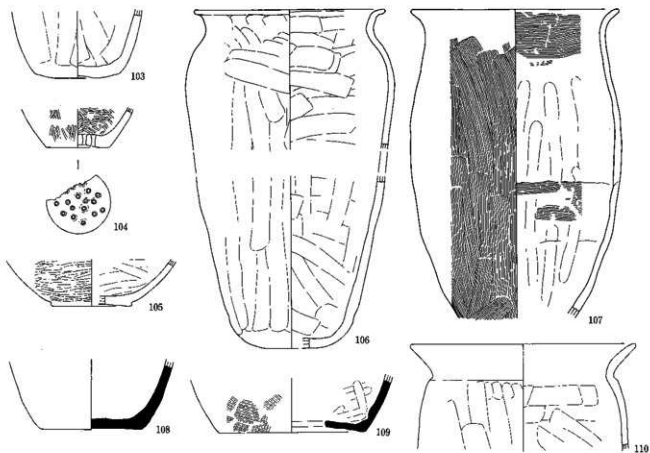


第6図 出土土器(2)

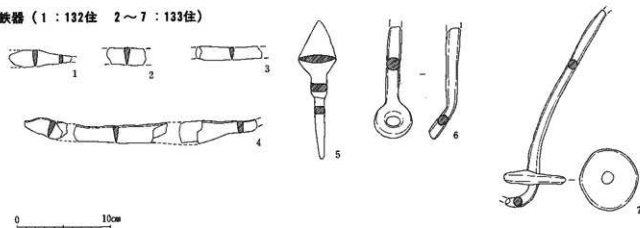
0 10cm



第7図 出土土器(3)



鉄器 (1 : 132住 2~7 : 133住)



0 10cm

第8図 出土土器(4)・金属器

No.	器種	遺構	計測値 (mm)・所見
1	刀子	132住	残存長51 最大幅14、厚5、6g 両関か
2	刀子	133住	残存長30、最大幅14、厚5、6g
3	刀子	133住	残存長53、幅11、厚さ5、6g
4	刀子	133住	実測図左から残存長33・幅14・厚さ6・4g、残存長76・幅5・厚さ11・14g、残存長64・基部幅12・厚さ11・14g、頸部に一部木質付着 棟側に関なし 刃関はあった可能性あり
5	鉄	133住	完存 全長111、筥被部28、茎部50、身部関幅31、21g
6	轡	133住	残存長90、軸径11、蛇口径31、幅11、38g
7	紡錘車	133住	残存長175、紡輪部最大径51、最小径47、中央厚11、縁厚5~7、74g

第4表 金属器一覽

出川南遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしいでがわみなみいせきぎんきゅうはつかつちょうさほうこくしよ							
書名	長野県松本市出川南遺跡V緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	Na139							
編著者名	田多井用章							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保管: 松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市中山3738-1・TEL0263-86-4710)							
発行年月日	平成11年(1999)年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いであななみ 出川南	ながのけんまつもとしいでがわ 長野県松本市 よしの 芳野	20202	177	36度 12分 20秒	137度 58分 10秒	19980410～ 19980421	281㎡	共同住宅建設に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
出川南	集落跡	古墳～平安	竪穴住居址 土坑 ピット	11軒 6基 11基	土器(土師器・須恵器) 鉄器		古墳時代後期～平安時代前期の集落址を確認した	

松本市文化財調査報告 No.139

長野県松本市

出川南遺跡V

緊急発掘調査報告書

発行日 平成11年3月26日

発行者 松本市教育委員会

〒390-0873

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 藤原印刷株式会社